【331】

氏　名（本籍）	塩谷育子（兵庫県）
学位の種類	博　士（ヒューマン・ケア科学）
学位記番号	博甲第 5852 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**アルコール依存症者に対する SAT 療法による介入研究**

主　査	筑波大学教授	保健学博士	宗像恒次
副　査	筑波大学准教授	博士（学術）	橋本佐由理
副　査	筑波大学准教授	博士（医学）	森田展彰
副　査	筑波大学講師	博士（医学）	笹原信一朗

論文の内容の要旨

（研究目的）

現在のアルコール医療において、12 ステップ法、動機づけ強化療法、対処スキルトレーニング、渇望誘発刺激に対する暴露療法、行動的カップルセラピー、森田療法的アプローチ、内観療法、認知行動療法、退院前インターベンション法などが用いられているが、主に飲酒欲求や飲酒行動に関する認知や行動の変容に主眼がある。これらはストレス状況における対処方法を身につけることができる効果がある反面、医療従事者や家族の評価を気にし、周りの人々のために「断酒する」という期待に応えねばならないという行動（他者報酬型行動）を強化する傾向がある。その結果、ストレスが高まり、再飲酒に陥ったり、喫煙、間食の増加、家族への暴言・暴力などの他の不健康行動をつくる傾向があり、悪循環していることがある。

本研究においては、アルコール依存症の最終的な目標である QOL の改善及び人格成長を目指すために、「正しく行動できるかどうか」で生きるのではなく、「愉しく行動できるかどうか」がウェルビーイングに重要であり、自分で評価でき、失敗を糧にして自ら学習、成長し、人に感謝できる行動（自己報酬型行動）を重視した生き方を支援する SAT 理論に基づき、自己報酬型行動の変容を目指した SAT 療法による介入を行い、その有効性について検討することを目的とするものである。

（研究課題 1）

（目的と方法）

アルコール依存症の専門治療病院を受診した患者及び一般会社員を対象に、ストレス認知に関する比較検討を行った。

（結果と考察）

アルコール依存症者群は、一般会社員群に比べて、家族からの情緒的支援認知や自己価値感が有意に低く、特性不安が有意に高かった。アルコール依存症者群と一般会社員群共に、情緒支援認知が低いほど自己価値感や問題解決型行動特性が低く、対人関係力も弱くなることからメンタルヘルスが悪化することがわかった。

(研究課題 2)

(目的と方法)

気持ちや感情に焦点をあてたSATソーシャルスキル講座を行い、上手な自己表現をするアサーション体験や、気持ちを傾聴するリスニング体験をすることで、情緒支援認知、自己価値感を改善し、メンタルヘルスの改善につながるか否かを検討した。対象は、アルコール依存症専門病院に入院及び退院した患者である。

(結果と考察)

仲間からの情緒的支援認知が改善し、自己価値感の改善し、メンタルヘルスが改善する傾向をしめした。講座前後では仲間で気持ちが分かりあい、共感しあうことで、メンタルヘルスは改善しめしたが、自己抑制型行動特性の改善はなかった。相手の評価を気にして自分の気持ちを抑える以前と同じ他者報酬型行動特性が存在するため、ストレスが蓄積しやすいので、自己報酬型行動特性への変容が必要と考えられた。

(研究課題 3)

(目的と方法)

SAT療法のよる3年間にわたる数回のカウンセリング介入を実施し、他者の評価を気にする他者報酬型行動特性を自分らしい生き方の自己報酬型行動特性に変容し、メンタルヘルスの安定した改善につながるかを検証している。対象は、アルコール治療専門病院に入院した患者4事例と一般病院に入院した患者2事例で、事例研究法を用い、また量的データを重ね合わせて検討を行うトライアンギュレーションをおこなって分析している。

(結果と考察)

SAT介入によって自己否定感が低下し、自己価値感が改善し、情緒的支援認知が改善しただけでなく、自己抑制型行動特性など他者報酬型行動特性が変化し、主観的ストレス源（日常苛立ち事）や特性不安が改善し、メンタルヘルスが良好となった。一般に自己イメージに本人の養育者イメージが影響を与えることが知られているが、良好な顔表情イメージ表象をもった本人のスピリチュアル・キーパーソン（実際にはいないきょうだいや親族）がいることを前提にして、これまでの成育イメージの変容をおこなうSAT療法で、養育者への期待水準が低下し、否定的な養育者の顔表情イメージ表象が良好となり、自己否定感が低下し、自己価値感が改善し、自己表現型行動、問題解決型行動など自己報酬型行動特性を形成し、ストレス源認知や特性不安が改善したことでメンタルヘルスが良好となったと考えられる。このことで依存からの回復の一歩になることが示唆されたとしている。

(結論)

アルコール依存の程度が重い入院患者の場合は、12ステップのほうが、認知行動療法より治療効果が高く、また、怒りや心理的抵抗の強い患者に対しては、動機づけ面接の方が、12ステップより効果があるといわれているが、これらの従来の様々なアプローチ法と共に今回の研究で効果が示されたSAT療法を併用することで、アルコール依存からの回復にさらに効果があると思われる。また前頭葉機能の低下がある人には、呼吸法や音楽療法や園芸療法、運動療法などを介して直接、脳幹に働きかける身体法、気持ちに焦点をあてたソーシャルスキル講座を併用するなどが必要であろうと思われると提唱している。

審査の結果の要旨

本研究は、世界各国で長年いろいろ治療法が試されてきたが克服の困難なアルコール依存症に野心的に取り組んでいる。まずはアルコール依存症の専門治療病院の患者群と一般社員群とを比較し、有意差をもつ心理社会的要因を明らかにした。つぎに患者仲間同士のグループカウンセリング介入の中で、心理社会的要因の改善を意図し、メンタルヘルスは有意に改善したが、ストレスを蓄積しやすい行動特性自体の変化はえら

れなかった。そこで、情動変容から行動変容を促す新世代の認知行動療法（従来は思考変容から行動変容を促す認知行動療法）であるSATイメージ療法をアルコール依存症にはじめて用いた研究をおこなった。個別に数回SAT療法を実施し、3年間の追跡して、効果のあったケースや効果の限界が見られたケースをトライアンギュレーション分析によって検討したものである。本研究をベースにした論文は国内のアルコール依存症治療の専門雑誌などに4本の学術論文が発表され、専門学会での評価をえているものと考える。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。